

前言

本書は、『中唐文学会報』16、17号（2009、2010）に発表した「王安石五言絶句訳注稿」と、2014年3月に私家版として刊行した『宋詩別裁 五言絶句訳注』の合本である。今回発表するにあたり、それぞれ若干の修正を施し、前者を第一章、後者を第二章とした。

唐代にはいわゆる今体詩の格律が整理され、それと同時に今体詩の制作数量が増加した。とはいえ、その中心を占めたのは五言律詩、七言絶句であり、中晩唐期にはこれに加えて七言律詩が増えるが、五言絶句の制作数は、同じ絶句でも七言のそれに比較すれば決して多くはない。

つづく宋代、とりわけ詩の享受者層が民間にまでひろがった南宋期、その新しい文学の場において、今体詩がおのずと詩作の中心にあったことは、周弼『三体詩』、方回『瀛奎律髓』など、今体詩のみを対象とする詩の総集・詩論書の出現にもうかがうことができる。律詩のみを収める後者はもとより、前者もまた七絶・五律・七律を収めて五言絶句をとらない。五言絶句はここにおいても一般的な詩型と見なすことはむづかしいようだ。

盛唐詩原理主義とも言うべき自らの詩観を、南宋期の新たな詩の享受者層にむけて発信した嚴羽は、「律詩は古詩よりも難く、絶句は八句よりも難く、七言律詩は五言律詩よりも難く、五言絶句は七言絶句よりも難し」という（『滄浪詩話』詩法）。彼もまた五絶を他の詩型に比して特殊なものにとらえている。

わたしたち盆詩の会は、2003年から、おおむね月に一回集まり、輪番で詩を読んでいる。会の名称を盆詩の会とした理由については、第一章「王安石五言絶句訳注」の「はじめに」を参照いただきたい。最初は王安石の五言絶句を、それをすべて読み終えた後は『宋詩別裁』所収の五言絶句を読みすすめた。上にも記したように、今体詩のなかでもいささか特殊な詩型と見なされる五言絶句をことさらに選んで読んできたことになる。かりに何故と問われても、これ

といった明確な理由は思い出せない。しかし、五言絶句ならではのおもしろさこそが、十年以上にわたって読み続けてこられた要因であることはまちがいない。

嚴羽が「五言絶句は七言絶句よりも難し」というのは、詩を書く立場にたつてのことであろうが、同じことは詩を読む場合にも言えそうである。わずか二十字という小さな容量のなかにかたちづくられた詩の世界。その世界に足を踏み入れるには、ことばが詩に変わる契機・瞬間を見逃さない鋭敏なまなざしが求められるだろう。必ずしもそのような目を持ち合わせないわたしたちは、ひたすら詩のことばを見つめる。そしてことばを発する。やがてふと詩の秘密が捉えられたと感じる瞬間、詩がいままさに生まれる場に立ち会う喜び。これは他のなににも代えがたいものだ。そして、五絶というきわめてコンパクトな詩型が、弛緩しがちなわたしたちの感性の集中力を維持する助けになってくれていることだけはたしかである。

上に記した「喜び」を自己満足に終わらせることのないよう、何らかのかたちで成果を発表することは、盆詩の会の発足当時から会員に共有された意志であった。そこで、発表を前提として、担当者ごとにあらたに原稿を書き起こす作業を行った。すべての原稿を会員全員が目を通し、意見の交換を行ったが、最終的な詩の読み、理解は、それぞれの担当者のものである。末尾に署名を付す所以である。

わたしたちの訳注を初めて発表する機会を与えてくださった中唐文学会の会員のみなさま、発表当時、『中唐文学会報』の編纂に携わってくださった幹事の方々に、厚く御礼申し上げます。

今回、E-book形式での刊行によって、少しでも多くの方々の目に触れる機会が得られることを期待している。誤解・誤読、その他不備は少なくないと思う。大方の批正を切に願います。

2015 年 3 月

和田 英信